

テゼからの手紙 2009年

2008年11月26日から30日、7000人の青年たちが、ケニアの様々な地域から、またアフリカの国々、さらには他の大陸からナイロビに集まりました。この集いは、「地上における信頼の巡礼」の一つとして、テゼ共同体^{コミュニティ}によって開催され、ナイロビの様々な教派の80ほどの教会がそれに協力し青年たちを迎え入れました。この集いの目的は、人々の間に友情をさらに築き、それによって、出会いの欠如や過去の歴史の傷によって今でも続く誤解を何とか乗り越えてゆくことでした。

テゼ共同体は、アフリカで55年間にわたって、少数のブラザーたちのグループが、非常に貧しい人々と生活を共にしてきました。今まで、アルジェリア、コート・ジボアール、ニジェール、ルワンダ、ケニアで生活し、ここ16年間は、セネガルのダカールで、住民の大半がイスラム教徒である地区に住んでいます。

ケープタウン（南アフリカ）の聖公会のデズモンド・ツツ元大主教は、こう書いています。「アフリカは、十字架と復活が、そのもっとも深い意味を示す場所です。そこでは、信頼と和解の営みが毎日の課題なのです。わたしたちは皆神の子であり、キリストの内にあっては、ルワンダ人もコンゴ人もなく、ブルンジ人もケニア人もなく、ナイジェリア人も南アフリカの人もありません。わたしたちは、キリスト・イエスにあってひとつなのです。テゼ共同体もこのことを告げようとしてい

ます。わたしたちはこの南アフリカで、アフリカ大陸のすべての国で、さらに世界中で『異質な他者への恐れ』が友情と和解と信頼に変容されねばならないことを訴え、テゼはその叫びに連帯しています。」

アフリカには多くの試練があります。しかしそれらの試練が尊厳の感覚を奪い取ることはありません。この尊厳の感覚は、しばしば非常に貧しい人々の中で明らかです。生活の困難が喜びを消し去ることがないのです。見通しがどんなに深刻であっても、踊りをやめることはありません。絶望に屈服しない人たちが多くいるのです。女性はこのような生き方のしばしば最先端にいます。創造性と忍耐で、彼女たちは家庭と社会で実に多くの役割を担っています。

この大陸を引き裂き続ける分裂に直面しながら、多くの人々が、勇敢に和解と解決を求めて努力し続けています。キリスト者は、希望に立ち続けるようにと招かれています。キリストにおける洗礼のきずなはどんな分裂よりも強いという希望。この信仰の確信のために命を差し出したアフリカのキリスト者たちがいるのです。

この「ケニアからの手紙」（テゼからの手紙2009年）は、テゼの院長、ブラザー・アロイスによって書かれ、2008年12月の終わりにブリュッセルで開催されたヨーロッパ青年大会で公表されました。

ケニアからの手紙

世界中で、社会と人々の行動の有り様は急速に変化しています。発展の可能性がつかないほど大きくなる一方で、不安定さも増し、未来への心配が増大しています。¹

¹ 多くの国々で、世界的な経済の成長や発展への期待にもかかわらず、スラムは小さくなるどころか大きくなりつつあり、失業は多くの人々、特に若者を厳しい状況に直面させています。アフリカでは、伝統的な生活で顕著であった緩やかな成熟という豊かな感覚が、急速な技術発展によって脅かされています。そのうえ、家族や部族の連帯は、ますます薄くなっています。どうしたらこれらのすばらしい価値観を息づかせ、さらには家族や部族を超えてそれらを伝えてゆける

技術や経済が、より豊かな人間性を伴って発展するためにどうしても欠くことのできないことがあります。それは、存在のより深い意味を探求するということ。多くの人々の疲労感や絶望感に向き合うとき、この問いが起こります。「いのちの源泉はどこにあるのか。」

キリストが来られる何世紀も前に、預言者イザヤは一つの源泉を示しました。「主に望みをおく人は新たな力を得る。走っても弱ることなく、歩いても疲れない。」²

ますます多くの人々が、この源泉を見つけられないでいます。神という名称さえ非常に誤解され、あるいは完全に忘れられています。信仰の消失と生きることへの熱意の喪失は関係があるのでしょうか。

源泉を塞ぐ^{ふさ}ものが何であれ、どのようにしたらその覆いを取り除くことができるのでしょうか。それは何よりもまず、神の存在に気づく^くということ。そこから、わたしたちは希望と喜びを汲み取るのです。

そのとき、源泉は再び流れ始め、日々の生活は意味深いものになります。そこでわたしたちは自分のいのち・人生に責任をもつようになります。贈りものとしてそれを受けとり、自分に委ねられた人々へそれを差し出してゆくのです。

そして、わたしたちの信仰がどんなにわずかであったとしても、そこには、もはや自分を中心にして生きないという人生の反転が生じます。心の扉を神に開くことによって、神が他の人々のところに来られるための道をも整えるのです。

人生に責任をもつ

神は、信者であるかないかに関係なく、すべての人の内に存在しておられます。聖書はその最初のページから、美しく詩的な表現で、神がすべての人間にいのちの息を注がれたことを語ります。³

地上でのご生涯によって、イエスは一人一人への神の限りない愛を^{あらわ}顕されました。イエスは、ご自分を与え尽くすことによって、神の「はい」を人間の状況の深みに

でしょうか。それは、多くの若者が、高い生活水準の国に魅了され、結果を十分考えずに祖国を離れてしまうことを防ぐでしょう。

² イザヤ 40:31。これらの言葉が話されたとき、疲れは既に現実のものでした。「わたしはいたずらに骨折り、うつろに、空しく、力を使い果たした。」(イザヤ 49:4)。「若者さえも疲れ、疲れ、彼らはつまずき倒れる。」(イザヤ 40:30)。しかし、預言者は希望を再び新たにさせます。「主は永遠の神。彼は疲れた者に力を与えられる。」(イザヤ 40:28-29)。

³ 多くの妨げが、生活を窒息させることがあります。わたしたちの周りにある様々な形の不正義や暴力。わたしたちの内側にある競争心、数々の失敗、異なるものへの恐怖や排他性、自尊心の欠如……。

ゆきわたらせました。⁴ キリストが復活されてからは、わたしたちはもうこの世界や自分自身に絶望することがないのです。

そのときから、神の息、聖霊が、永遠にわたしたちに与えられました。⁵ わたしたちの内に住まわれる神の霊によって、神は、このあるがままのわたしに「はい」と言われます。そしてわたしたちは、預言者イザヤのこの宣言を日々飽きることなく聞くのです。「主はあなたを喜びとし、あなたの大地は配偶を得る。」⁶

ですから今、自分が何者であり何者でないのかを受け入れましょう。そして、今まで選択してこなかったことにも、その責任を引き受けるのです。それらによって今のわたしがあるのですから。⁷ 完璧でない状況の中でも、あえて創造的に生きるのです。そのとき、わたしたちは自由を見出します。苦悩の日々にも、この人生を贈りものとして、また一日一日を「神の今日」として受け取るのです。⁸

自分を超えて導かれる

もし神がわたしたちの内におられるのなら、神は同時にわたしたちの前を進まれます。⁹ 神は、このわたしのありのままを受け入れてくださいます。しかし同時に、わたし自身を超える道にも招かれます。しばしば神は、わたしたちの計画や事業を

⁴ アフリカの広大な地域で、たとえばマサイ族のキリスト者の中では、キリストは兄と考えられています。それは初期キリスト者たちの表現に似ています。キリストは「多くの兄弟姉妹の中の長男」(ローマ 8:29)なのです。その死とご復活によって、イエスは、家族や種族の結束も越えて働かれます。(参照：コロサイ 1:18-20)

⁵ 聖書では、「息」と「霊」は同じ単語です。預言者たちは、神が人間の内に聖霊を通して住まわれることを告げました。(エゼキエル 36: 26-27)。キリストの到来、またその死とご復活によって、聖霊が「限りなく」(ヨハネ 3:34)与えられるのです。それ以来、神の息は人類の中で絶えず働き、いつかすべてがキリストにあって一つのからだとなるのです。

⁶ イザヤ 62:1-4

⁷ 目の前の現実に関心を取り戻すということは、すべてを容認したり、その出来事に受け身で従うということではありません。ときには、不正義に抵抗し、それを訴えるということにも導かれるのです。

⁸ ブラザー・ロジェの初期の著作の中に「神の今日を生きる」(1958)という書物があります。ブラザー・ロジェは、過去への郷愁の内に難を避けたり、非現実的な未来に向かって逃避するより、むしろ現代社会の「今日」にしっかりと存在するキリスト者の重要性を確信していました。わたしたちが神に出会うのは、そして神の内に人生の基盤を置くのは、すべてこの「今」というときなのです。

⁹ アフリカのキリスト者、聖アウグスチヌスは4世紀にこの祈りを記しました。「あなたは、わたしのもっとも深いところよりさらに深いところに、わたしのもっとも高いところよりさらに高いところにおられた。」(『告白』3巻6章11)

くつがえ

覆し、わたしたちの生活を揺るがされます。¹⁰ このような視点を理解する助けは、イエスのご生涯です。

イエスはご自分の道を聖霊に委ねられました。イエスは、目に見えない神、すなわち御父の存在について語ることを決して止めませんでした。これがイエスの自由の基盤で、それによってイエスは愛のためにご自分のいのちを差し出されました。イエスにとって、神との関係と自由な選択とは、互いに排他的ではありません。むしろ互いに補強し合うものでした。¹¹

わたしたち皆の中に、無条件なものへのあこがれがあります。わたしたちはそれからだと精神と心、つまりわたしたちの全存在で熱望します。幼児から高齢の者まで、すべての人の中に愛への渇きがあります。もっとも強い人間の親密ささえも、この渇きを完全に満たすことはできません。

わたしたちは、この切望をしばしば欠乏感や空しさとして体験し、道を見失うことがあります。しかし、このような体験は決して異常なものではなく、それはわたしたちの存在の有り様のひとつなのです。それは贈りものです。既に、その体験の内側に、自分自身を開くようにとの神の呼びかけが響いています。

そして、こう自問するようにと招かれています。今、前に進むために何をすべきかと。それは必ずしも「より多くを行う」ことではありません。わたしたちは、「より多く愛する」ようにと呼ばれているのです。愛は、わたしが自分の全存在をかけて愛することを求めます。ですから、今すべてはわたしたちに委ねられています。隣人に関心を払うということ、しかも時を置かず隣人に向かうということ。

できることがどんなに小さくても、それを行わねばならないということ

信仰を深めるために互いに助け合う

実に多くの青年たちが、その内なる旅で孤立感を味わっています。わずか二人または三人が集まれば、仮にそこに信仰より疑いの方が強いと明言する人がいても、互いに助け合い、分かち合い、共に祈ることができるのです。¹²

¹⁰ 「主は言われる。『わたしの道は、あなたたちの道と異なる。』」（イザヤ 55:8）聖母マリアもまた、目の前の出来事の向こうにあるものを見つめる道を選びました。息子の不可解な死さえも、神がいのちの約束に誠実であることを信じながら受諾したのです。

¹¹ 2008年10月にローマで開催された世界司教会議で、マリン・ブリュッセルの大司教、ダンニール枢機卿はこう述べました。「みことばの力は聞き手の応答の自由を含意します。これこそ神のみことばの力の意味なのです。神のみことばは、聞き手の自由を排除しない、しかし同時にその人間の自由の基盤なのです。」

¹² イエスは言われた。「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいる。」（マタイ 18:20）

このような分かち合いは、それが地域の教会と結び合わされたとき、豊かに支えられます。¹³ 教会は、その地域のすべての共同体を包む共同体で、そこでは、すべての世代の人々が集まり、人々はお互いを選ぶことをしません。教会は神の家族で、わたしたちを孤立から^{コミュニケーション}交わりへと招き入れます。そこで、わたしたちは歓迎されず。そこで、わたしたちの存在への神の「はい」が現実のものになります。そこにわたしたちは、神の無くてはならない慰めを見出します。¹⁴

もし地域の教会と青年たちのグループが、心からの親切と信頼の場所、もっとも弱い人たちに心が向けられる歓待の場所になったら・・・。

社会の様々な隔てを越えてゆく

より一致した人類家族を目指して働こうとするとき、もっとも今必要なことは、この世界を「下から」見るということではないでしょうか。¹⁵ そして、そのためには、生活のすべてを単純素朴にさせることが不可欠なのです。

情報伝達はますます便利になっています。しかし同時に、社会の中の区分の壁は高くなったままです。無関心という危険は大きくなり続けています。社会のこれらの隔てを越えて歩き出しましょう。苦悩する人々のところに向かってゆくのです。無視されている人々や虐待されている人のところに向かってゆくのです。すぐ近くにいながらしばしばとても遠くに置かれている移民の群れに心を向けるのです。¹⁶ 苦悩がますます深まる場所で、希望のしるしとなる具体的な働きが増え続けることがよくあるのです。

¹³ 初代のキリスト者たちは「使徒たちの教えを学び、友情を深め、そしてパンを裂くことと祈り、これらに専念した。」（使徒言行録 2:42）アフリカでは、ラテンアメリカやアジアのいくつかの国々のように、キリスト者は教会に集うだけではなく、同じ地区や村、そして小さな教会の集会にも集います。彼らは共に祈り、互いに支援の手を差し伸べます。そこには、暖かさと個人的献身があり、そのようなことが、教会を交わりの真正な場所として証するのです。

¹⁴ アフリカでは、教会はしばしば神の家族として、そして神は慰める母親として理解されます。既に、預言者イザヤはこう記しました。「神は言われる。母親がその子を慰めるように、わたしはあなたたちを慰める。」（イザヤ 66:13）イザヤ 49:13-15 も参照。このように教会を理解するとき、わたしたちは教会の一致に向けて努力せざるを得ないのです。わたしたちは、神の家族が多数の異なった教派に分裂したままであることに甘んじることはできません。

¹⁵ ドイツの神学者ディートリッヒ・ボンヘッファーは、どちらかというの特権階級に属する人でしたが、第二次世界大戦の間、抵抗運動への関わりによって危険な状況に追い込まれ、最後は収容所で死をむかえました。1943年に、彼はこう記しています。「比類なきひとつの価値の体験だけが残っている。それは、世界史の大きな出来事を下から見つめることを学んだということ。追放された人々、容疑をかけられている人々、虐待されている人々、無力な者、抑圧され軽蔑されている人々、つまり苦悩する人々の視点から出来事を理解するということ。」

¹⁶ 今日、幸いにも、絶滅の危険にさらされている文化を守るために、多くの人が努力しています。しかし、ひとつの文化は他から隔離されては発展しません。このグローバル化時代に、文化の混合は避けられないものというだけでなく、それはわたしたちの社会にとって大きな利点でもあるのです。

不正や抗争の脅威に立ち向かうためには、また物資の分かち合いを推し進めるためには、技術を獲得することも大切です。研究や専門的な訓練に忍耐して身を置くことも、他の人々に仕える道となります。

貧困と不正が非道な姿で表れるとき、それははっきりと目に見ることができます。しかしそれほど目に見えない貧困の形もあります。そのひとつは孤独です。¹⁷

偏見と誤解は、しばしばひとつの世代から次の世代に引き継がれ、それが暴力的行為につながる場合があります。一方で、一見無害に見えながら、実際は大きな傷を負わせ、他者に屈辱を与える暴力の形もあります。そのひとつは嘲りあざけです。¹⁸

どこにいようとも、それが一人のときも何人かと共にいるときでも、苦悩するその場の状況の中で、今具体的にできることを探すのです。このようにして、わたしたちは、予想していなかった場所にさえもキリストを発見するのです。死から復活されたキリストは、人々のただ中におられます。そしてキリストは、人に寄り添う憐れみの道を先に立って歩まれます。そして、今すでに、聖霊を通して、キリストはこの地上のすべてを再び新たになさっておられます。

<付録> 開かれたヨーロッパのために、それは連帯の大地

ヨーロッパ連合 (EU) へのメッセージ

人類家族の平和と和解への探求は、テゼ共同体の召命のひとつです。この30年にわたって、テゼ共同体は「地上における信頼の巡礼」を主催してきました。そこには、何世代にもわたって青年たちがあらゆる大陸から集まりました。

この巡礼のひとつとして、2008年12月29日から2009年1月2日まで、4万人の青年たちがブリュッセルに集まりました。それは、新しいヨーロッパの構築に取り組もうとしたあの直観と情熱に再び火を灯すためです。それは、共通の資源と個別に与えられた可能性を分かち合うことによって、異なる民族の間での和解を現実のものにしようとする熱意です。

ひとつのヨーロッパ (EU) を構築しようという並はずれた冒険

ヨーロッパは、まず平和のうちにこの冒険を始めることに成功しました。これは歴史上、先例のないことでした。ここまでのEUの歩みは、世界の他の地域に非常に

¹⁷ ケニアのことわざがこれについて語っています。「孤児になることのできない人はいない。」

¹⁸ 『テゼの規律』(1954)の中で、ブラザー・ロジェはこう記しています。「嘲笑は共同生活の毒です。それは不誠実です。なぜならそれは、覆いの下で一方的な「真実」を相手に押し付け、しかもそのことを面と向かっては語ることをしないからです。それは卑怯です。他者の前でそのブラザーの人格をおとしめる行為だからです。」

大きな希望を与えました。実に多くの闘争の後に、ヨーロッパは確かにある安定を獲得したと言えます。しかし、すべての世代の人々は、この安定を日々確かなものとするように招かれているのです。

無気力感に屈しない

EUの諸機関へのまなざしには、今日、ある種の無気力感が見られます。しかし、ヨーロッパ社会のあらゆるレベルで常に責任を促すという条件を満たしさえすれば、これらの諸機関はEUの持続を確かなものとするために不可欠です。¹⁹ 一方、各国の指導者たちは、難しい決断を迫られるときに、これらの諸機関に罪をきせるような不公平を避けることによって、EUへの新しい見通しを切り開くことに貢献できるはずで

世界的広がり の 連帯へ

多くの青年たちは、この大陸のすべてで個人的な関係を実にたくさん生み出すことによって、既に「一つのヨーロッパ」という意識を獲得しています。それは、それぞれの民族や地域の特別な特徴を捨てることではなく、多様性を尊重しながら異なる可能性を分かち合おうとすることなのです。ヨーロッパボランティアサービスのような働きは、異なる民族や地域の間での相互理解を深めるにちがいありません。

「一つのヨーロッパ」を構築するということは、他の大陸を忘れず、地球で最も貧しい人々との連帯のうちに自らを存在させるときに、初めてその本来の意味を持ちます。

多くの青年たちは、経済のグローバル化が連帯感のグローバル化と手を携えることを願っています。豊かさを分かち合おうという願いの内に、経済的に豊かな国々は、発展途上国に豊かさをもたらすような投資をすること、そしてそれらの国々からの移民を暖かさで責任をもって歓迎すること、これらの寛大さを世界に示してくれるでしょうか。

今日の財政危機

今日の財政危機は、経済発展を持続させるためには、どうしても倫理的な視点を考慮せねばならないことを示しています。この危機は、わたしたちが世界社会を確立する際に最優先にすべきことは何なのかを問う機会なのです。わたしたちはいったいどのような発展を願っているのか。どのような発展がこの地球の限りある資源を大切にしようとするのか。

¹⁹ 共同体感を深めるために、末端の地域の自治性を重んじることは重要です。その地域で決定できることはその地域で決定すべきです。この実践によって、ヨーロッパ連合の諸機関は、人々が受け身であったり、絶え間のない要求だけに走ることを抑制させるのです。

経済的・財政的な組織が複雑であればあるほど、それは、人類全体の公益を促進するために調整されねばなりません。正義をさらに確立させる基本規則を設定する超国家的な機関は不可欠です。²⁰

キリスト者の二つの貢献

福音は単純素朴な生活の大切さを語ります。それは、規則によってではなく、それぞれの選択によって、様々な欲望に制限を設けるとのことへの招きです。²¹ 自由な選択に基づく単純素朴さは、経済的に恵まれた人々に過剰な豊かさを放棄させ、恵まれない人々を支え、彼らに押し付けられた貧困に立ち向かうことを可能にします。

キリスト者のもう一つの貢献は、赦すという生き方です。そのような生き方は、深い傷の記憶を次の世代に残すことを止めます。それは苦痛に満ちた過去を忘れることではなく、赦しによってその記憶を乗り越え、怒りの連鎖を断ち切る生き方なのです。赦しなくしてこの社会の未来はありません。この確信が、「一つのヨーロッパ」を構築しようという確かな熱情の基盤となったのです。²²

すべての人は、疑惑ではなく信頼を生きることによって、文明を築くことに加わるのです。歴史は語ります。ほんのわずかな人が平和のために動き出す、これで十分なのだ。²³

Taizé Community

71250, France

Tel(+ 33)385 50 30 30

www.taize.fr

²⁰ 1963年、教皇ヨハネ23世は、その回勅「地上に平和を」の中で、「世界の資力を治める公の権威」の設定を提案しました。この預言的な直観が今ほど意味をもつことはありません。

²¹ イエスは言われた。「人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の身を滅ぼしたり、失ったりしては、何の得があるか。」(ルカ 9:25)

²² この確信は、フランスとドイツの間の和解を押し進めました。またそれは、ポーランド人とドイツ人の相互の赦しに関して、1969年にポーランドの司教たちが主導した行動の基盤となりました。このように、キリスト者が政治的な和解の道を整えたのです。

²³ EUの創始者はほんのわずかな人々でした。しかし彼らには、輝かしい直観がありました。兵器の再供給に使用されたかもしれない資源(石炭と鉄鋼)を共通の資源として利用し始めることによって、新たな紛争を防ごうとしたのです。